

平成 29 年度第 1 回熊本市小中一貫教育検討委員会議事録

(平成 29 年 7 月 14 日)

- 1 開会 15 : 00
- 2 委嘱状交付（新規役員のみ）
- 3 教育委員会あいさつ
- 4 自己紹介
- 5 委員長選出
- 6 議事

熊本市小中一貫教育の在り方について

- 指導課より概要説明
 - ・平成 28 年度の経過報告
- 小中一貫教育モデル校実践発表
 - ・富合地区（富合小学校より）
- 質疑，協議

古賀座長	本日は第 1 回目ということなので、今、熊本市の小中一貫教育がどの段階まで来て、今後どのような方向に進んでいくのか、その共通理解を行い、更に進めていくための議論ということで行っていきたい。議事は、「熊本市小中一貫教育の在り方について」となっている。まずは、これまでの取組を確認した上で今後のことについて話を進めていく。 はじめに、指導課より説明があった。次に、富合小学校から、平成 16 年度にスタートした小中一貫教育の取組について説明していただいた。富合小、中学校の取組は、今年で 13 年目にもなる。取組が始まったころは新設教科もたくさんあったが、現在は「国際科英語」に絞って焦点化された活動であり、それを紹介していただいた。2 つの説明について、質問はないか。半分以上の委員の方が入れ替わっているので、基本的なことも含めて質問をいただきたい。
長尾委員	小中一貫の取組を今後前に進めていくということで、来年度の連携カリキュラム熊本市版の配付や平成 31 年度の小中一貫型学校の設置という流れを考えておられる。指導課から取組の成果について報告があり、取り組むことによって成果が大きいことはよく分かった。しかし、連携のために校内研修を設定したり、交流のための時間を確保したりなど、時間の確保が一番大きな問題になってくるのではないか。小学校は来年度から 35 時間純増することもあるので、現場からはどのように時間を確保すればよいのかという声が上がってくるだろう。解決策として考えられるのは、土曜授業、そして、クーラーの設置が進めば夏休みの縮減による時数の確保だろう。もう一つ、課題として考えられるのは「連携の組み方」である。1 小 1 中のところは組みやすいが、複数小と一つの中学校、複数小と複数中が連携する場合は連携がやりづらいだろう。連携のパターンをいくつか出

平成 29 年度第 1 回熊本市小中一貫教育検討委員会議事録

(平成 29 年 7 月 14 日)

	して、見通しをもってやっていくべきではないかと思う。
古賀座長	時間の確保と連携のパターンについて意見が出された。これらのことについては、これまでも議論を重ねてきたところであるが、事務局から説明はないか。
事務局	熊本市の学区は、小学校から中学校への進学を考えたときに非常に入り組んでいて整理するのが難しい状況である。「連携の柱」を決めるのも連携校が定まらないとなかなかやりづらいので、「中学校区を連携校として取組を進める」と考えている。進学先が複数にまたがる小学校においては、進学者数が最も多い中学校を連携校としてはどうかと考えている。学校現場には、まだそのような話はしていない。連携を強めていく中で、「複数校にまたがって連携しづらい」というような意見が学校から出てくれば、そのような提案をしようと考えている。時間の確保については、学習指導要領が大きく変わるという変革の時期に、更に小中一貫教育もするのかということで、学校現場の負担感が大きくなるのであれば本末転倒だと思う。長尾委員のご意見のとおり、時間確保のためには、土曜授業や夏休みの縮減も方法として考えられる。その他にも、あれもこれもとたくさんの取組を行うのではなく、内容を精選することや、先進校の事例を生かして効率的な運営を行うことも、解決策となるのではないかと考えている。
古賀座長	先ほど富合小から、小学校から中学校への授業参観をしているという報告があった。中学校の先生方が小学校に出向くのは比較的やりやすいが、逆はなかなか難しく、これまで、このことが大きな課題であった。どのような工夫があったのか。
森校長	ずっと以前は兼務の先生が小学校と中学校双方にいらっしゃったようだが、現在はそうではない。しかし、相互の交流が必要ではないかということで、中学校からも要望があっていた。一緒に授業するのは難しい面があるので、まずは参観することから始めている。本来は専科の時間には、担任は T.T. で入ることが望ましいのだろうが、高学年と中学年は専科の時間を活用して中学校に行っている。1 回なので、低学年も時間をやりくりして行っている。
古賀座長	できるところから取組をされていることが分かった。
上野委員	小学校と中学校の学区のことについてだが、竜南中学校は中央区にあ

平成 29 年度第 1 回熊本市小中一貫教育検討委員会議事録

(平成 29 年 7 月 14 日)

	り、碩台小の校区であるが、碩台小学校の子供たちはほとんど来ておらず、現在は 1 名だそうだ。中学校の周辺の小学生はあまり来ていない。一番多いのが、北区の清水小からの子供達である。遠いところは自転車で通わなければならないという生徒もいる。そんな学校が何校かあると思うので、地域の人も含めて話し合いを行うなど、学区の見直しが必要なのではないかと考える。一方、それとは全く逆で、私自身は芳野小、芳野中出身で、小中の連携が昔からあった。子供達が少ないというのがその理由であろうが、今でも合同の運動会があっている。小中一貫校という検討ができるのではないと思う。それらの地域が統廃合となると更に校区が広がってしまう。
志波委員	上野委員の話のとおり、碩台小は元々竜南中校区だが、子供達は藤園中、白川中、竜南中にまたがって進学している。やりづらい面もあるが、見直しも簡単にはいかないかと思う。私が五福小に勤務していた時は、五福小、慶徳小、城東小の 3 校で自然の家に行くなどして、小学校の時期から連携していた。また、飽田南小に勤務したこともあったが、飽田中校区は非常に連携が進んでいて、地域も含めた連携ができています。飽田西小、飽田東小、飽田南小がそのまま飽田中に進学するので、このような一貫教育はとてもやりやすいのではないかと思います。まずは、そのようなやりやすいところから進めていき、見直していくというようにしていってはどうか。目標を一つにして富合小、中学校の合同の授業研究会は素晴らしいと思った。一点質問だが、表の中で「合同」と書いてあるところが小中合同で授業研究会を行ったということか。
森校長	そうである。
志波委員	打ち合わせの時間はどのようにしているのか。
森校長	図工・美術や音楽は T1 で中学校の先生が行うので、小学校の先生はサポートをしている。英語の場合は T1 だったり T2 だったりするので、最低限の打ち合わせは必要になってくる。
古賀座長	先ほど委員の方から具体的な学校名が出されたが、これからは、平成 30 年度にモデル校を作っていくための情報のやり取りが必要になってくる。小さな学校に関しては、どんな形で地域に残していくかということを考えると、統廃合という方法ではなく、小中一貫校として特色ある取組を行うことで「小規模特認校」の制度も取り入れ校区外の子供達も通えるように

平成 29 年度第 1 回熊本市小中一貫教育検討委員会議事録

(平成 29 年 7 月 14 日)

多賀委員	するという方法も考えられる。このような、具体的な学校についての情報のやり取りも必要になってくる。例えば、向山小と江南中は歩いてもさほどかからない。一方、富合小学校と中学校は、車で 10 分近くかかる。 状況は学校によって様々なので、一小一中の校区、小学校がいくつか分散して中学校と連携している校区というように、パターンがいくつかあれば今後広がっていきやすいかと思う。私が指導課で担当していた時、広島が平成 10 年代に先駆的に取組を進めていた。昨年、政令指定都市の中学校校長会があったときに、京都の市長さんが元教育長をされていて、小中一貫は必要だということで全市的に取り入れられたということだった。導入にはいろいろな苦労があったと思うので、委員会の方で情報収集をして参考にされたらより進めやすいのではないかと思います。 本校の話になるが、小さい学校で 5 クラスしかないので家庭科と美術は非常勤講師で、先生方は授業が終わったら帰って行かれる。子供の情報が伝わらないままである。他の中学校との兼務をされている先生もいらっしゃるが、先ほど紹介があった富合中学校のように、小学校との兼務にさせていただくと校区の子供の情報も伝わるので、よりよい連携につながると思う。
古賀座長	広島のことが紹介されたが、熊本市の小中一貫教育も呉市の取組を参考に進めていくようには考えている。京都市や横浜市ではすべての小中学校で小中一貫教育を行う取組が進んでおり、文科省も小中一貫教育を推進しているところである。平成 32 年度からは、小学校では新学習指導要領の全面実施となるので、その前の平成 31 年度にはある程度形をつくっておく必要があろう。熊本市が、全国的に見て遅れているという状況は避けたい。今後の方向性として、平成 30 年度に向けた平成 29 年度取組という点でご意見はないか。
橋爪部長	今回から参加させていただく。富合は特区をつくられていた平成 16 年から、長きにわたる取組がなされてきて、先日総合訪問で富合中にお邪魔したとき、中 1 ギャップの解消や分かりやすい授業の実施、小中学校が一貫して目標値をもち取組を進められるということで、効果ありということでは分かった。しかし一方で、課題として負担感が挙げられる。平成 31 年度に小中一貫型学校をつくるようになったときに、何ををもって一貫型学校なのかを明らかにする必要がある。富合小、中学校ではロードマップや 9 年間で目指す子供像を共有して取り組まれている。カリキュラム以外にも乗り入れ授業や交流が必要になってくるであろう。したがって、どれくら

平成 29 年度第 1 回熊本市小中一貫教育検討委員会議事録

(平成 29 年 7 月 14 日)

塩津課長	いの人的配置が必要なのか、モデル校や指導課で検討していかなければならないのではないかと。兼務教員に関しては、仮に国語で考えると、毎日 5 時間の授業時数で残りの 1 時間は生活ノートを見る時間が必要であるので、実際問題として乗り入れ授業に行く時間は生み出せない。したがって、年間でこのような取組をするという計画を立てたうえで、カリキュラム以外に兼務教員や小中学校をつなぐコーディネーターなどの人的配置などを考えていかなければいけないし、一貫校と呼べるだけの具体的な実践の例示をしていく必要があると考える。その辺りのご意見も今後それぞれの立場からお願いしたい。 今の件であるが、平成 30 年度にはそれぞれの中学校区で連携カリキュラムの作成を考えている。それは「学び」や「生活習慣」などについてのカリキュラムになると思うが、それぞれの校区でできるところから取り組んでもらうように考えており、このことについては昨年度から周知を図っている。学校訪問に行っても、このことについてはお知らせしている。私どもも平成 31 年度に向けての取組は始めたばかりである。先ほど紹介のあった横浜市や京都市など、他都市でもこの取組は進んでいる。定数はどうなっているのか、時間のとり方はどのようにされているのかなど、今後検討して、次の会で紹介させていただければと思う。具体的なことを示した中で、具体的内容に対して、あるいは対象となる学校についてのご意見を伺えたらと思う。
荒木委員	橋爪部長が言われたことを私自身は心配している。これまで、生活科や総合的な学習の時間が入ってきたときも、先進的な取組をしている学校から進めて、それを参考にして広げていくということだったが、本当にそれができているかという疑問が残る。年度末の計画の見直しから新年度のスタートという流れが、うまくいっていない。先進的な連携カリキュラムを参考にするのはいいが、小中学校の両方を見て、マネジメントする人がいないとなかなか成り立たないのではないかと。推進するリーダー役の配置があればありがたいと思う。学校現場では、カリキュラムの話がなかなか出てこない状況である。本校は幸い 1 小 1 中で連携が取りやすいが、それでもどちらが中心で行うか曖昧で、具体的な取組の推進は難しいと感じているところである。そういう意識や環境をつくっていくのも大事だと思っている。カリキュラム自体も構想できる人が作っていくといいのだが、ペーパーだけだと次に生きてこないと思う。これまでも総合的な学習の時間等でそのような面が見られた。

平成 29 年度第 1 回熊本市小中一貫教育検討委員会議事録

(平成 29 年 7 月 14 日)

古賀座長	カリキュラムについては、これまでいろんなやり取りをしてきた。これまでの実績を大切にしながらカリキュラムに反映させて、富合の場合は外国語活動に取り組んでおられるし、熊本市の場合は、徳・知・体の徳である道徳を中心にして、地域の人を巻き込んだ小中での取組というように、活動レベルでのカリキュラムということも考えられる。精緻化するのには時間がかかると思うが、これまでの先進校の取組を参考に進めるなど、できるところからやるという考え方で進めるのが適当であろう。昨年度の向山幼稚園・向山小学校・江南中学校、今年度の富合小学校・富合中学校、碩台幼稚園・碩台小学校、これらの学校が来年度は 2 倍の 6 校区あるいは 3 倍の 9 校区というような広がりを見せて、更に再来年の 31 年度にはさらに増やし、できれば 5 区に 1 校区ずつモデル校があるように輪を広げていくのはどうだろうか。ただし、以前 PTA から「学校によって学習内容が違うのであれば困る」という意見が出されたので、それに対応する策として「熊本市のスタンダード・カリキュラム」を作成するという話が進んでいたかと思う。一気に全てではなく、できるところから始めて、先進校で学んだ先生たちがまた他の地域で広めていくということも期待できる。若い先生方の資質・能力を高めることも熊本市の課題であるので、校内研修で先生方が鍛えられることや、その場づくりも大事になってくる。小中一貫のシステムと、内容であるカリキュラムについて議論を重ねて、それをモデル校で検証するような流れを座長として考えている。
磯田委員	昨年度からこの会に参加させてもらっている。モデル校同士での協議の場を設定されるといいのではないかな。1 小 1 中や複数校の連携など形は違うかもしれないし、カリキュラムが一本化したものになるのは難しいと思うが、お互いに情報をやり取りすることでバリエーションや方向性などの参考になるのではないかな。実際そのような場はあるのか。
古賀座長	設定はされていないので、情報交換や共有という点では、この場がそれに当たると言えるだろう。また、幼小中連携の日が設定されているので、その活用も考えられる。モデル校については、そろそろ 1 小 1 中の校区から複数小 1 中の学校にチャレンジしていく時期になってきたのかというように考えている。例えば、外国語の実践をされている錦ヶ丘中学校には複数の小学校から集まってくるので、中学校を中心にして英語でやればどのような連携ができるか、そのようなことも可能性として考えていく必要があるだろう。 磯田委員の提案のように、情報の共有は大切であると考えている。私は平成 20 年から富合小、中学校に関わっているが、富合小、中学校の取組は、熊

平成 29 年度第 1 回熊本市小中一貫教育検討委員会議事録

(平成 29 年 7 月 14 日)

塩津課長	本市に合併してから他の学校にあまり浸透していないと言える。旧富合町の時、宇土市の網田小中一貫教育とセットで進めてきた経緯がある。その時富合小学校におられた校長先生が、網田でキャリア教育をしっかりとやられていて、それを富合の「生き方創造科」につなげる等、試行錯誤をして進められてきた。 他に意見はないか。 事務局から補足説明はないか。 貴重なご意見をいただいたので、ぜひ参考にさせていただきたい。情報共有の場としては「連携教育担当者会」を年に 2 回開催しているので、2 回目の会のもち方を検討したい。また、連携の例としては英語教育で考えると、楠中学校校区で連携が始まっており、形は違ってもいろんな例が考えられるので、指導課としてはそれぞれのよさを吸い上げていきたい。また、他都市の情報も集め、今回は例年よりも時期を早めて 9 月あたりに開催したい。PTA からも積極的なご意見をいただきありがたい。ぜひ PTA 協議会でも話題にさせていただき「子供たちのために」という同じベクトルで、いろんな方向からの意見をいただけたらと思う。
古賀座長	では、意見がないようなので、少し小中一貫、小中連携についての話をしたい。 小中一貫教育に関しては、大体 8 割のところは 4・3・2 制をとっている。小 1 から 4 年生までを前期、5 年生から中 1 までを中期、中 2、3 年生を後期としている。これを強力に進められたのが元早稲田大学教授、現在は神奈川大学特別招聘教授の安彦忠彦先生である。これまで中央教育審議会のリーダーとして活躍された方だが、安彦先生によれば、子供達の育ちを考えると現在の 6・3 制は無理があり、中 1 ギャップ等が生じるのも当然であるということである。そのような考えのもと、広島県呉市での実践を始められたのが平成 12 年のことである。そこで、事務局からも紹介があったように、不登校がなくなった、いじめが少なくなってきた、子供達の顔が明るくなってきた等、様々な効果が見られ、中学校に進学することの不安感がなくなってきたという動きがあった。 もう一つ、教育の世界では 4 歳、10 歳、14 歳という節目を言うことがある。10 歳は、八つ、九つ、十と言うように「つなし」と言われたり、あるいは 2 分の 1 成人式が行われる歳であったり、また、14 歳は逸脱行為等が一番多く現れる年齢である。4・3・2 制にすると、その 10 歳と 14 歳を節目にすることができる。そういった意味では、不安になるような 10 歳、14 歳に自尊感情を育てるような取組をするということで、富合もこの 4・

平成 29 年度第 1 回熊本市小中一貫教育検討委員会議事録

(平成 29 年 7 月 14 日)

事務局	3・2 制を取り入れられている。また、安彦先生も講演に来られている。 これからの平成 29 年度の議論は、平成 30 年度の具体的な取組についての情報収集と課題の検討になっていくであろう。では、議事に関わる部分はここまでにして、事務連絡をお願いします。 たくさんの貴重なご意見に感謝する。2 回目は 9 月を予定しているが委員の方々の都合を聞いてご案内をする。
-----	---